

「イスラエル建国史」

7 ドレフュス事件 ユダヤ・中東研究家 滝川 義人



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー(1968～2004)として勤務。現在、MEMRI(メモリ、中東報道研究機関)日本代表。ユダヤ、中東研究者。主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』(新潮社)、『ユダヤを知る事典』(東京堂出版)など多数。

フランス陸軍大尉ドレフュスの逮捕と追放

ロシアのボグロムは、日露戦争時にも発生するが、1881年に始まる連続的ボグロムは、1884年6月モスクワ東方ボルガ河畔のゴルキ(現ニジニノブゴロド)で起きた事件を最後に一応終息し、その後20年ほどは小康状態が続いた。しかし、1881年に即位したアレクサンド



ロシア皇帝
アレクサンドル3世

ル3世(1845～94)は、苛烈なユダヤ対策をとり、ユダヤ人の流出が続いた。一方、反ユダヤ主義を克服したと思われる西ヨーロッパのフランスで、事件が起きる。

1895年1月5日、パリのシャン・ド・マルス(練兵場)で、1人の軍人に対する追放式が挙行された。宮庭に引き出された軍人は、フランス陸軍大尉の階級章をもぎとられ、軍人の魂ともいべき帯剣を折られて、軍人としての最大の侮辱を与えられた。そして、南米の仏領ギアナにある悪魔島へ送られる。長さ3.2キロ、幅わずかに800メートルの岩の島で、特別囚のみを収容する監獄島である。本人は石造りの小屋に入れられ、鎖につながれて暮らすことになった。

その軍人の名は、アルフレッド・ドレフュス(1859～1935)といい、アルザス地方ミュルーズの出身。両親と



アルフレッド・ドレフュス

同じく本人も同化ユダヤ人であった。国防軍所轄のエリート校である高等工業専門学校を卒業して、砲兵将校に任官。さらに幕僚教育課程を修了後、大尉として参謀本部勤務

となった。陸軍の最高機関で唯一のユダヤ人であった。ドレフュスは、人付き合いは悪いが、真面目で仕事熱心、有能な軍人であったが、突然逮捕された。1894年10月15日のことである。

裁判結果に対する抗議

1894年夏、フランス軍防諜部が、ドイツのパリ駐在武官室のゴミ箱から、ボルドロー(手書き目録)を回収した。ドイツ側へ渡されたか渡される予定の、フランス軍機密文書のリストである。

そこで、参謀本部内にスパイがいるという話になった。目を付けられたのが、参謀本部内唯一のユダヤ人、ドレフュスである。ユダヤ人であるから忠誠心がないとされ、目録がドレフュスの筆跡に似ているというだけのこと、逮捕されたのである。

1894年12月、レンヌで行われた非公開の軍法会議において、ドレフュスは国家反逆罪で終身刑の判決を受けた。その後、追放式を経て、悪魔島送りになったのである。

しかし、兄のマテューを初め何人かの人たちが、裁判に疑問を抱いた。ユダヤ人の文筆家ベルナル・ラザルが『ドレフュス事件の真相』と題する小冊子をつくって配布した。しかし、反響はほとんどなかった。

1896年3月、ジョルジュ・ピカール中佐が新しい防諜部長に就任した。中佐は裁判の審理に疑問を抱き、徹底的に調べなおしてみた。そして意外なメモを発掘した。引き裂かれていたが、参謀本部のM・エステラージ少佐に宛てたもので、発信人はドイツの駐在武官である。調査を進めていくと、例の目録もエステラージの筆跡であることが判明した。そして、裁判用資料を参謀本部のH・J・アンリ少佐が捏造していたことも判った。

ピカール中佐は、これを参謀総長と次長に報告した。しかし2人は、決着済みとして打ち切りを命じた。そして、ピカールが不服であることを知って、アルジェリアへ左遷する。だが、ピカールは良心の命ずるままに、親友の弁護士に知らせた。命令違反、規則違反でピカールは投獄されたが、世論に訴える道が開けたのである。



ピカール中佐



エステラージ少佐



エミール・ゾラ

その道は平坦ではなかった。フランスの文豪エミール・ゾラは「私は糾弾する (J'Accuse)」を旗印に再審要求の論陣を張った。軍は威信にかけて戦い、メディアと大衆を味方につけ、さらに民族主義者 E. ドリュモンが反ユダヤ色濃厚な愛国団体を拠点に機関誌『言論の自由 (La Libre Parole)』で、ユダヤ人ドレフュスの背後には得体のしれない強力なシンジケートがあると、フランス破壊を目論む国際ユダヤ資本に操られているとか、あるいはエステラージ犯行説はユダヤのでっち上げといった陰謀話を流し、大衆はそれを信じこんだ。フランスに住む同化ユダヤ人はこの現象におびえ、火の粉が飛んでくることを恐れて、

ドレフュスに連帯できなかった (1899 年の再審でドレフュスは 10 年の刑に減刑され、さらにルーベ大統領が恩赦令を出した。再審支持派は不服であったが、身も心もボロボロになったドレフュスは、これ以上争う力がなかった。控訴院が最初の判決を無効にしたのは 1906 年、左派政権が生まれた時である。ちなみにエステラージはイギリスに逃げ、アンリは獄中で自殺した)。

ヘルツェルの登場

ドレフュス事件を最初から取材したのが、オーストリア紙ノイエ・フライエ・プレッセのパリ特派員テオドル (ベンヤミン・ゼーブ) ヘルツェル (1860 ~ 1904) である。

ハンガリーのペストに生まれ、1878 年に両親と共にウィーンに移住した

人であるから、生粋のウィーン子ではない。ウィーンとベルリンの両大学に学び、1884 年に法学博士となった。しかし、本人は法律の道に進まず、ジャーナリストになった。そして 1891 年 10 月、パリ特派員としてフランスへ行く。

ヘルツェルの祖父は正統派のユダヤ人であったが、ヘルツェル本人は両親と同じく、社会上文化上周圍 (キリスト教社会) に同化していた。学生時代アルピアという学生クラブに入っていたが、反ユダヤ的空氣に嫌気がさして、2 年後に脱会している。

啓蒙期を経て解放された西側社会であっても、反ユダヤ感情は一朝一夕では消えなかった。ヘルツェルは、それまで若い世代の組織的な大量洗礼か社会主義運動への参加で、

反ユダヤ主義は消失するかと考えていた。しかしながら、パリに着任したヘルツェルは、差別を克服したはずのフランスで、依然として反ユダヤ的環境が濃厚であることに気付くのである。

着任早々、書いた記事が「フランスの反ユダヤ主義」である。議会でユダヤ人の弁護士資格剥奪法案が提出され、上院 (元老院) では否決されたが、下院では議席数の 3 分の 1 ほどにあたる 160 人の議員が賛成案を投じた。1892 年のパナマ運河疑獄では、ユダヤがからんだスキャンダルとして報道された。

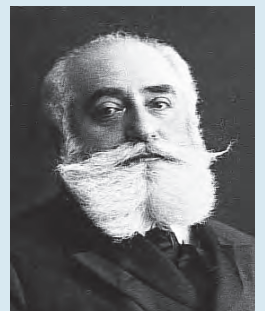
ヘルツェルは、ドレフュスが一切の名誉を剥奪された追放式を目撃し、「ユダヤ人くたばれ」と叫ぶ群集の声も聞いた。その声を耳にして、ヘルツェルは「ここは一体どこなのか。人権宣言を発して 100 年たつ文明国フランスではないか。第三共和制のフランスで

はないか」と書く。この時の経験が、長年ユダヤ人問題について抱いていた苦悩を結晶化し、同化によるユダヤ人問題の解決が幻想にすぎないことを、知らしめたのである。多数派としての生活圏を持たない限り、問題は解決しない。ヘルツェルは、民族と領土の問題を解決するための趣意書『ユダヤ人国家』(1896) を書いた。それには「ユダヤ人問題の解決 — 試案」という副題が付いていた。

シオニスト kongress への道

ヘルツェルは 1895 年 7 月に特派員生活を終え、ウィーンに戻ると文芸欄の担当となったが、パリで知りあった思想家で医師のマックス・ノルダウ (1849 ~ 1923) と二人三脚を組んで、運動を展開することになる。

ハンガリー出身のノルダウは、1880 年にパリへ移住し、医業のかたわら主要新聞紙に健筆をふるっていた。ヨーロッパの反ユダヤ主義を強く意識し、ドレフュス事件に心を痛めていた。2 人が会ったのは、ヘルツェルが特派員生活を終えようとする 7 月である。ユダヤ人国家建設の趣意書原稿を見せられたノルダウは、日頃考えていた問題について「目的と具体的内容」がここにあると考えた。



マックス・ノルダウ

同志となった 2 人は、大衆運動の組織化を検討し、ヨーロッパのユダヤ人社会の代表を招いた大会を計画した。かくして生まれたのが、シオニスト kongress である。

* 滝川義人氏による「イスラエル建国史」1 ~ 4 は、『イスラエル・トゥデイ』(7 月をもって休刊) 4 ~ 7 月号に、連載されています。購入ご希望の方は、お申し込みください。
1 冊 500 円 (送料 100 円)



ゾラの記事「私は糾弾する (J'Accuse)」